

DEAFENING SILENCE : Media Response to the May 9th Event and its Implications Regarding the Truth of Disclosure

By : Jonathan Kolber

異常な沈黙：5月9日の出来事に対するメディアの反応と公開の真実に関わる意味

執筆： ジョナサン・コルバー

2001年5月9日のワシントン・ナショナル・プレス・クラブでの
公開プロジェクトによる歴史的記者会見についての論説

(2002年5月1日付文書； [公開プロジェクトのウェブサイトより](#))

本文の目的は、2001年5月9日のナショナル・プレス・クラブにおける記者会見について、メディアが奇妙なほど限られた取り上げ方しかしなかったことの重大な意味を明らかにすることである。

あの記者会見では、二十数人の証人が前に進み出て、ET（地球外知性体）の技術、またETに関係した技術について、彼らが直接に知っていることを証言した。これらの証人たちの主張によれば、彼らは最高機密取扱許可を持ち、軍と民間において最高度の任務を遂行してきた。その何人かは、検閲されていない機密文書を皆の前に大きく掲げて見せた。世界の主要メディアが出席していたにもかかわらず、そこで見たものを報道した機関は少なかった。多くは懐疑的な言及さえしなかった。

このようなことがあるのだろうか？ 重要な法的裁判では、あの日に提示されたものより弱い証言にもとづいて判決が下される。実刑判決は、もっと弱い証拠にもとづいている。ウォーターゲート事件の最初の証拠は、もっと弱かった。そして、これが意味するものにくらべたら、ウォーターゲートなど大したことはない。それにもかかわらず、この静けさは異常である。

三つの可能性

もしそれが真実なら、証人の証言は文字どおり、まったく新しい平和な世界と全人類の繁栄をもたらす基盤の到来を告げるものだ。ディスクロージャー（公開）の真実性を検証することは、おそらく現代の最重要問題である。人類の未来に対するその意味があまりにも大きいので、事実上そのほかのすべては二次的な事柄になるほどだ。しかしメディアは、

その検証をしてこなかった。証人の証言を立証または反証するための、いかなる調査報道もなされてこなかった。

資料不足がその原因ではあり得ない；この論説の残りの部分で、私は5月9日に世界のメディアに配られた資料にもとづき、検証を行なってみようと思う。

私の考えでは、ただ三つの可能性がある：証人たちは全員嘘をついていた、彼らは全員妄想に取り憑かれていた、または、彼らは史上最大の隠蔽工作を立証していた。その理由は次のとおりだ。もし証人の誰か‘一人でも’嘘もついていなかったし妄想にも取り憑かれていなかったなら、そのとき公開の真実性は立証される。これらの可能性について、順に吟味してみよう。

もし証人たちが嘘をついていたなら、分別のある立会人はこう訊いただろう。“見返りは何だ？”誓約をして議会で証言する機会を与えてくれと訴える嘘つきにとり、考えられる利益は何か？最もありそうな見返りは、刑務所への旅だろう。これらの証人たちは、いかなる金銭的対価、講演の契約、またはそのような何ものをも公然とは要求していない。そして公開プロジェクトの活動は、二十数人に報酬を支払う能力を持たない。同プロジェクトの‘生産物’をざっと眺め、シャーロットビルにあるそのオフィスに行ってみれば、それが分かるだろう。さらに、その親組織であるCSETI（地球外知性体研究センター）は、IRS（米国税庁）501C3非営利組織であり、その資金不足は公式の記録事項だ。だから、証人たちが何か物質的な利益のためにそうしていたという考えは、手元にある事実からだけでも根拠がない。

私が知る限り、何か抵抗し難い利益への期待なしには、大勢の人間が嘘をつくために結託することはない。金でないとしたら、この場合私が考えつくただ一つのは、イデオロギーである。一体どのような過激派の‘イデオロギー’が、民間企業と軍の高い地位にいた、このような様々な証人たちのグループをもっともらしく結びつけることができるだろうか？彼らのほぼ全員が、これまで言葉と行動で合衆国に対する一貫した忠誠を示してきたのである。私にそのようなものは見出せない。だから、私は嘘はありそうもないとこれを退ける。

さらに、証人たちの主張によれば、彼らは見事な信用資格を持っている。その中には一人の准将、一人の提督、以前に核発射ボタンに手をかけていた人々、航空交通管制官たち、米国の主要企業の副社長たちがいる。彼らは日常的に人々の生命を管理下に置くか、すべての人々に影響を与える決定をしていた。私が知る限り、5月9日以来の半年間に公的な場でその信用資格が疑われた人は、一人もいなかった。もし彼らが集団で嘘をついていたなら、それを暴露することは一部の記者にとり手柄になっていただろう。しかし、それは起きなかった。

もし、証人たちの全員が妄想に取り憑かれていたなら、分別のある立会人は、このような‘集団精神病’は急に現れたものではないと推測しただろう。つまり、多数の証人たちは過去に、おそらく場合によっては入院をも含め、精神異常の傾向を示していたはずだ。私が見る限り、その疑いはこれまで誰からも主張されていない。

もし、彼らが史上最大の隠蔽工作を立証していたなら、5月9日に特定事例の詳細を列挙した説明資料が多数の出席記者たちに配られていたのだから、公聴会開催の全国的な要求と共に、その報道はかつてないほどメディアで大きく扱われていただろう。このどちらも起きなかった。

意味するもの

メディアの状況と証人の証言について、上記の事実と推論が意味するものは何か？ 私の考えでは、それらは多くを意味している。

もし、証人たちが嘘もついていなかったし妄想にも取り憑かれていなかったとすると、5月9日の後の異常なメディアの沈黙は、‘真実を探求し明らかにすることを失敗させる、ある国際的な工作’があったことを意味する。はっきり言えば、それは検閲があったことを意味している。(もし私が正しいなら、このことはそれ自体でメディアの注意を引く重大な爆弾発言である - それをメディアが受け入れることはないだろう) 重要性において5月9日に匹敵する話題は、第三次大戦、何百万もの人々を死に至らしめる疫病、そのようなことだ。それにもかかわらず、5月9日と9月11日の間、ニュース報道は比較的瑣末な話題で埋め尽くされた。

説明資料は出席していた記者たちに配られた。これらの資料は、真実を探求するあの記者たちにとり十分に配慮されたものだった。しかし、ウォーターゲートのような報道も、証人のペテン行為を暴く報道もなされなかった。

証人の一人は、実際は米国政府のために働きながら主要メディアの職員名簿に名を連ねる、43人の人物がいることに気付いた様子を報告した。彼らの任務はETに関係した話題を途中で押さえ、それを潰し、情報を操作し、あるいは愚弄することだった。もし‘彼’の証言を事実として受け入れるなら、5月9日の後の異常な沈黙はそれで説明がつく。

この状況の中で、一つの希望も見える。メディアのいくつかは、ほんの数日間であったとしても、確かに実際に報道した。これが示すものは、メディアの報道を支配している者たちの権力は一枚岩ではないということだ；彼らの裏をかくことはできる。あの日の出来事はインターネット上を駆け巡り、25万人の視聴者により目撃された。ただし、‘巧妙な電波妨害’が最初の1時間続いた(これを言ったのは放送接続業者であって、公開プロジェクトではない)。実際、公開プロジェクトのウェブサイトには、あの日の完全な記録映像が掲

載され続けている。

結論

証人のペテンまたは集団精神病を暴くことは、それ自体一部の記者にとってはおいしい、出世に結びつく話題であったはずだが、そのような話は一つも報道されなかった。だから私の結論は、これらの証人たちは彼らが主張するとおりの人々であるということだ。

もしこれらの証人たちが、彼らが主張するとおりの人々であるなら、彼らは彼らが真実だと信じる証言を提示したのだ。その上、あの証言の‘事実に関する’詳細について、メディアの中で異議が唱えられたことは一度もない。その調査を行なうのに、半年間というのは十分な期間である。証言は提示されたとおり、真実であると私は信じる。

もしデータが提示されたとおりに真実で、メディアが現代における、誰もが認める最大のストーリーを本質的に無視しているとする、そのときメディアは彼らが行なうと主張している仕事を遂行していないことになる。彼らは抑圧または検閲されているか、人々がこの話題に興味を示すとは信じていないかのどちらかである。

タブロイド紙は ET 関連の話題を取り上げ続けているし、世論調査は人々がこの話題に高い関心を持っていることを示している。だから、関心の欠如という評価は説明になり得ない。私の結論は、能動的な抑圧があるということだ。これは、43 人の情報機関作業員が主要メディアの職員名簿に名を連ねているという証人の主張により、裏付けられる。

能動的な抑圧があるにもかかわらず、5月9日の出来事についての十分な報道が主要な出版と放送メディアで行なわれ、抑圧を阻止できることを証明した。十分な影響力を持ち組織化された重大な出来事は、検閲を突破することができる。ET に関係した技術と、それがアラブの石油への我々の依存を終わらせるためにどれほど重要な意味を持つかについて、以前は気付かなかったか懐疑的だった何百万もの人々は、あれ以後そのことに気付くようになった。

我々は管理社会に生きている。その中で管理は秘密にされるが、開放されているかのようには偽装される。それでも、5月9日に立証されたように、この管理は決意を持った人々のグループの協調努力により、打開できるものだ。このような機会を、我々は再び追求すべきである。

(訳： 廣瀬 保雄)